

Book Review

もやもやした臨床
の疑問を研究
するための本
緩和ケアではこうする
著：森田達也



B5判・284ページ
定価：本体3,600円＋税
発行：医学書院

「なんとかしたい！」臨床疑問を 研究にする技術

評者

宮下光令

東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア看護学分野教授

本書は「臨床で困っていることを研究でなんとかしたい」「でも、どこからどう手を付けていいかわからない」もしくは「論文を書きたい」「しかし、どこからどう手を付けていいかわからない」という看護師のための本である。

臨床現場で困っている、なんとかしたい気持ち、それが本書でいう「もやもや」である。それを解決するために研究にチャレンジしようと考えて看護研究に関する書籍を読んでみるのだが、「どうにもピンとこない」。看護研究の書籍にはいろいろな研究の方法論や統計が網羅的に書かれているのだが、どうやったらそれを目の前の疑問の解決につなげられるのか、わからないのである。

研究には看護と同様に「経験知」という側面が強い。教科書を読んだだけで看護ができる人がいないように、研究も経験を積まないと場面場面での判断は難しい。逆にいえば、経験を積んだ人は、「こういうときにはこう整理して、こう考える」という言語化しにくいパターンが身についているものである。看護であつてもなくても、常に正しい判断をしている人に会うと、「この人の頭の中はどうなっているのだろうか?」と思うことがある。

森田達也氏は臨床研究で500本以上の論文を世に出してきた、緩和ケアの分野のいわば世界的巨匠であり、評者のメンターでもある。森田氏とは20年来のお付き合いになるが、素晴らしいところは、常に「臨床の疑問を解決するために」研究活動を行なってきたところである。そして、本書は森田氏の数多くの経験から、臨床疑問をどのように研究に発展させていったらよいか、壁に当たったらどのように考え、克服するかという「森田氏の頭の中はどうなっているのだろうか?」という森田氏の身につけたノウハウやパターンをわかりやすく整理し、惜しみなく開示してくれている。森田氏はそのパターンを「技術」という。研究に特殊な才能やひらめきは必要ない。事実に基づき頭の中をこのように整理していけば研究として形にできるのである。

本書は2つのパートから成っている。前半のパートは上記のように研究の進め方に関するもので、後半は論文の書き方である。森田氏は論文の書き方も「技術」として「型」に当てはめて書く方法を指南する。特に論文執筆で一番難しい「はじめに」と「考察」の型は秀逸であり、これを

読むためだけにでも買う価値がある。

さらに私たち看護師に好都合なことに、看護学研究と緩和ケアの研究は似ている。医学研究では、薬剤の投与と血糖値や死亡などの客観的な指標に対する効果を見る臨床試験などがメジャーな研究手法である。しかし、看護学研究や緩和ケアの研究はエンドポイントがQOLなど客観的な測定が難しいものが多く、また、介入自体が治療やケアの担い手である医師や看護師、その他の職種と患者・家族の相互作用によってもたらされることが多い。医学研究ではいまだ傍流であろう質的研究も多用される。したがって、本書で紹介されているノウハウは、ほとんどすべてが看護研究にもあてはまる。例示されている研究も私たち看護師にとってわかりやすい。買わないわけにはいかない、ライバルには教えたくない本である。